

habitat interpenetration

0814127 李元奎 (指導教員：八尾 廣)

1 はじめに

動物園は博物館の一種に分類され生物を生きのまま貯蔵する学習、研究施設の役割を持つ。

近年、動物に対する見方が変わる中で動物園という場所もまたその展示様式の変化がなされてきている。

しかし地方の動物園ではいまだ劣悪な環境のまま放置されているものが多い。動物園を教育の場とするのならば現代社会においてその形態の変貌は必要不可欠なのではないだろうか。

2 姫路市立動物園の現状

姫路私立動物園は姫路駅から北側にあたる世界遺産、姫路城のすぐ脇にある。しかし客足は少なく、家族連れで賑わう姿はおよそ感じられない。

その理由として 1) 現代人たちの動物園離れ 2) 古いままの展示様式 3) 場所がわかりにくい

などが挙げられる。特に 2) 古いままの展示様式は檻・柵型展示であり、動物が異常行動を起こす程の環境である。



3 計画内容

3.1 計画地概要

計画地：兵庫県姫路市神屋町763

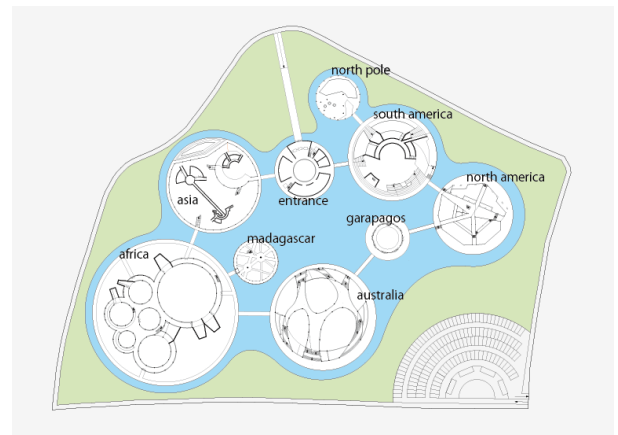
設計範囲：動物園

敷地面積：65,493.62 m²

3.2 プラン

テーマ：高低差を利用した動物園

園全体のゾーニングを出入り部分のエントランス棟と動物展示エリアをアジア、アフリカ、マダガスカル、オーストラリア、ガラパゴス、南アメリカ、北アメリカ、北極と分けて配置する。それぞれのエリアを分かちように海を模した湖を広げる。また GL から 2 m 下げ周辺を森林で園全体を覆うことで街との境界をぼかしながらも存在感を失わせないようにしている。園の中で動物たちは地理学的配置されており、エリアからエリアへ移る際に一度水辺に架かる橋を介する事でエリアが変わるという事を体感できるようになっている。園を回る人たちがどの地域の動物なのかを体で実感しながら見られるようにしている。



水平方向の視線による観察が主であった人と動物との関係に建築的要素を盛り込み観賞スペースを立体的に操作することで動物の身体的特徴に対するアプローチに幅を持たせた空間を提案する。展示空間は展示される動物の棲息環境を再現し、動物の行動を「歩く、泳ぐ、登る、飛ぶ」と分類する。「歩く、泳ぐ、登る」の行動特性の動物の境界は展示される動物に合わせた高さを持たすことで脱走を防いでいる。「飛ぶ」という行為に関しては垂直方向への経路を遮断しなくてはならないが、ここでその動物が飛ぶ行為を抑制しない高

さを保ちながら空間を覆う。

動物と人間の境界はベースとしてガラスで仕切られている。人間と同じ、もしくはそれ以下のレベルの場合はガラスで仕切り、動物が届かないレベルからは柵を使い同じ空気を共有する。これによりガラス越しには動物の大きさや表情などの情報を読み取りやすくし、柵により同じ空気を共有することで鳴き声や動きの情報も分かりやすくなる。マダガスカル、ガラパゴスエリアでは人間を警戒しないという特性を生かし、人間と動物の動線を共有し空間を立体的に構成し畜産動物以外でのふれあいを確立している。

学び場としての機能を充実する為にエントランス棟部分に資料室、剥製室、イベントブースを設計している。これにより展示されていない動物の情報の取得が可能になり、動物関係の講演会の開催にも対応できるようになっている。

4 街との関係性

姫路駅が高架駅になった事により、駅北側には東西に旧線路後の空き地が広がっている。街の大きな流れは現在姫路城までの北への道と市役所のある南への道がメインとなっている。しかし、駅前の空き地には今後現在施行中の駅ビルに続き新しい街の流れが東西に広がっていくだろう。その最も東の旧線路後地に動物園を計画することにより、街の流れに動物園をもう一度組み込み街の顔として活性化させる。

